

リカードウ機械論研究の展開
——スラッフアによる「革新的変更」をうけて——

報告者 石井穰（関東学院大学）

1. はじめに（問題設定）

スラッフアは『リカードウ全集』への編者序文において、機械導入の影響に関するリカードウの立場変更を「革新的変更」（*Works I, lvii*: 訳, lxxvii）として大きく取り上げた。またスラッフアは、リカードウが旧来の立場から新たな立場へいつ、どのようにして変更していったのか、書簡などの諸資料をもとに考察している。この「革新的変更」という表現は、その後のリカードウ機械論研究への大きな刺戟となっただけでなく、上記の資料的考察もまた、リカードウ機械論の形成史を考える上で、重要な出発点となった。

しかしながら、スラッフアの考察は、リカードウ機械論がもつ理論的意義を、十分に解明しえたとはいえない。またスラッフアの経済学的考察は、古典派のアプローチの復権の試みとして、価値と分配の理論を中心としたリカードウ解釈に影響を及ぼしたものの、リカードウ機械論の理論的意義解明には、ほとんど結びついていないように見える。

そこで本報告では、スラッフアによる考察が、リカードウ機械論の理論的意義の解明には、あまり貢献していないことを、スラッフア経済学の特徴、および欧米および日本でのリカードウ機械論研究の展開という両面をふまえて考察する。

2. 機械導入についてのリカードウの立場変更

リカードウが『経済学および課税の原理』第3版第31章で行った、機械導入についての立場変更について概観し、この議論が同時代だけでなく、その後も解釈上の論争を引き起こすことになった理由を簡単に確認したい。

リカードウは当初、機械導入は労働者階級を含むすべての階級にとって利益であると考えていた。『原理』第3版第31章のはじめに、リカードウは、たとえ機械導入が経済のある特定の部面で失業をもたらすとしても、労働者を雇用する資本は依然存在しており、経済のその他の部門において、労働者を雇用するために用いられると考えていたと述べている。この想定のもとでは、機械導入は労働者階級に一時的に不利益をもたらすとしても、雇用を減らすことにはならず、労働

者階級もまた、機械導入による生産性上昇と生産物価格の低下による利益を得ると考えられていた (*Works I*, 386-388:訳 444-446)。

だがリカードは続けて、上記の考察は、純所得が増加するときにはつねに総所得もまた増加するという間違っただけの想定によるものであると論じている。そして、純所得が増加する一方で、総所得を減少させるのであれば、機械導入は労働者階級には不利益であるとの主張をリカードは展開する (*Ibid.*, 388:同上 446)。さらにリカードは、数字例を用いつつ、再生産過程のなかでの流動資本の固定資本への転化によって、機械導入は総所得と雇用を減少させることを論じている。

とはいえリカードは、同章の後半において、蓄積過程のなかでの機械導入に言及した際には、増加した純所得が再投資されることで、機械導入はすべての階級にとって利益となるという立場を再び表明している。そして利潤率低下傾向への抑止作用になることや、機械導入規制による資本の海外逃避にも言及し、最終的には機械導入は制限されるべきではないとの主張を行っている。

産業革命の時期、機械打ち壊しなど、機械導入をめぐる意見の対立が深刻であったこと、またリカードはそれまで機械導入は全般的利益とする立場をとっていたことから、リカードのこの立場変更は、同時代の経済学者たちにとって、大きな関心の的となった。その一方で、リカードは『原理』第3版第31章の終わりでは、再び機械導入は全般的利益であるとの立場を示していることもあり、リカードの経済学体系と、機械導入についての彼の立場変更との理論的関係をいかにとらえるべきか、という解釈上の問題を、その後の研究に対して残すことになった。

2. スラッファによるリカード機械論へのコメント

すでに述べたように、スラッファは『リカード全集』編者序文において、第3版における変更を説明する際、まずリカードの機械論に言及している。スラッファは『原理』第3版第31章の前半でのリカードの立論に着目し、機械導入は労働者階級にとっては不利益になるという主張に対して「革新的変更」という表現を与えている。スラッファのこの表現は、リカードが1820年頃まで、機械導入は全般的利益であるとの立場を明確にしていたこと、それが1821年の『原理』第3版において突然、覆された（ように見える）ことを強調しているものと考えられることができる。

その一方で、スラッファはリカードがこのような立場変更に至った経緯も考察する。リカードの書簡集を参照しつつ、スラッファは1817年にバートンに書き送った手紙 (*Works VIII*, 155-159:訳 185-190) や、マカロックが『エディンバラ・レビュー』において、バートンを擁護する主張したことを批判したリカード

ウの手紙 (*Ibid.* 171-172:同上 193-194) をもとに、1820年の夏までは、リカードウが機械導入についての従来の立場を固守していたことを示している。

そしてスラッファは、1820年の秋頃に書かれたと推定される、『マルサス評注』の注 147 および 153 (*Works II*, 231-233, 239:訳 293-298, 306-307) において、リカードウが機械導入は総所得を減少させることから雇用減少に言及したことをもって、リカードウの立場変更がなされたと論じている。さらに『原理』第3版の出版後、マカロックからの異論から自説を断固として弁護したことをもって、スラッファはリカードウの立場変更が気まぐれなものではなかったことを示そうとしている。

このように、『原理』第3版第31章での立場変更を強調し、その形成過程を資料的に跡づけたスラッファの考察は、その後のリカードウ機械論研究の大きな軌跡となった。ただリカードウ機械論研究の展開におけるスラッファの意義は決して小さくないとはいえ、スラッファは価値と分配の理論を考える上での固定資本の役割を除いて、リカードウの機械論がもつ理論的意義については、ほとんど言及していない。スラッファの経済学的考察も、その後のリカードウ機械論研究において考察されてきた理論的意義との関連で、重要な役割を果たしてきたとはいえない。

3. スラッファ経済学とリカードウ研究

本節ではスラッファの経済学的考察の背後にある問題意識をまず確認する。そしてスラッファがリカードウ研究に及ぼした影響、またスラッファの視点ではリカードウ機械論の理論的意義を十分に評価するのは難しい理由を考えたい。

スラッファの理論的考察の出発点は、マーシャル部分均衡論批判であった。スラッファは1925年に「生産費用と生産量の関係について」という論文を公表し、マーシャルの費用分析を批判している。スラッファによれば、マーシャルは部分均衡下での価格分析において収穫逓減、収穫一定、収穫逓増の場合を考察しているけれども、完全競争の前提に適合する形で分析しうるのは費用不変（要素についての収穫不変?）の場合のみであると論じている。また1926年に公表された「競争的条件の下での収穫の法則」では、収穫逓増のケースを独占分析に結びつけている。以上のような主張は、マーシャル批判によって独占理論への道を開くものとして評価される一方、その後の限界理論を基礎とした価値と分配の理論への批判へと結びついてゆく。

スラッファは1960年に『商品による商品の生産』を出版し、（要素に関する）収穫一定を前提とした価格・分配論を展開することで、限界理論に依拠した経済学への根本的批判を試みている。とりわけ、外生的な分配関係の決定を前提とし

た価格体系の考察は、新古典派的な体系への批判として重視されてきた。このような特徴は、リカードウ解釈上提起された論点にも反映されうる。

限界理論を出発点とした経済学では、効用最大化および利潤極大化を前提とした需要関数をもとに、生産要素価格を含む価格体系が決定され、しかる後に分配が決まるという理論的枠組みが構築されてきた。それに対して、リカードウ的な（もしくは古典派的な）体系は、スラッファによれば、需要ではなく供給条件を出発点に、分配→価格という決定様式を示している（Dobb 1973, 257-266:訳 277-308）。またスラッファは、リカードウ『利潤論』について、利潤率が穀物量でみた投入に対する産出の比率から考案されており、資本の限界生産性から資本利子を考察しようとする際に、限界理論が直面した困難を解決しうるものとして評価している（Works I, xxxii:訳 xlv）。ここからスラッファは古典派的枠組みの復権の試みとして、剰余アプローチを論じることとなる。

ただし、分配と価格体系との関係にしても、賃金・利潤の相反関係にしても、産出量所与の経済における議論とみなされる。ここで展開される価値と分配の理論は、「生産が日々かわらないまま続けられるような体系」（Sraffa 1960, 5:訳 ii）を出発点としており、静態的（もしくは均衡論的）議論とみなされてきた。

このようにスラッファは、静態的な経済を前提とした、限界理論にかわる価値と分配の理論という観点から、リカードウ経済学を評価していた。そしてリカードウ研究におけるスラッファの影響は、このような観点到に制約されてきたともいえる。このことが、その後の研究で論じられてきた、リカードウ機械論の理論的意義を考えるにあたって、スラッファの理論的考察が重要性をもつにいたっていない理由であると考えることができよう。

4. これまでのリカードウ機械論の解釈

次に、欧米および日本のリカードウ機械論の理論的研究は、それぞれいかなる理論的基礎を背景として展開されてきたか、そこでスラッファの経済学的考察が果たした役割について考えてみることにしたい。

もともと欧米では、マーシャルやキャナン以来、劣等地耕作の進展と差額地代論、それを前提とした穀物価格決定などをふまえ、限界理論・一般均衡論に親和的なリカードウ解釈が存在してきた。それゆえ、価格メカニズムを通じた資源の完全利用を想定する上記の立場からすれば、リカードウによる機械についての立場変更は、それまでのリカードウ体系とは不整合をきたすものと考えられた。

たとえばヴィクセルは、リカードウが、生産力の発展にもかかわらず総生産物が減少すると論じた点を批判する（Wicksell 1934, 133-134）。そして、その後の経済学者たちは、競争均衡は必ずパレート最適（Pareto optimal）をもたらすとい

う立場から、論理的に欠陥があるとリカードウを批判した。また森嶋もまた、セー法則およびパレート改善の立場から、リカードウ機械論に批判的な立場を示している。彼は当初から総生産物の減少を排除し、かつ固定資本の価値が生産物に移転される形でリカードウの議論を読み替え、雇用減少という帰結を排除しうるとした（Morishima 1989, 171-180:訳 178-185）。

それに対してサミュエルソンは、ヴィクセルを批判し、リカードウの正しさを認めている（Samuelson 1989, 54-55）。サミュエルソンは、賃金率が低下しても、古い生産方法への代替は生じないとしてヴィクセルを批判する。ただしサミュエルソンは、労働人口の変動により長期的な失業の可能性は否定されるとする。また森嶋によるリカードウ機械論解釈は、その後、Kruz and Salvadori(1992)らの反論を引き起こした。以上のように欧米のリカードウ機械論研究では、市場経済は果たして資源の完全利用を可能にする効率的な体制かどうかという点に、論点が見いだされてきたといえよう。

以上の流れのなかで、リカードウ経済学を、静態的（均衡論的）方法をもとに、限界理論にかわる価値と分配の理論という観点から取り上げるスラッフアの議論では、上記のようなリカードウ機械論の意義付けを十分に評価することは難しいといえよう。

他方、第二次大戦後の日本では、限界理論もしくはミクロ経済学的な理論的伝統が薄く、マルクス経済学の影響力が非常に強かったことから、異なる解釈が提起されてきた。『剰余価値学説史』および『資本論』での記述をもとに、資本蓄積にともなう機械導入および雇用・失業との関係などに焦点をあてて解釈が多く見られた。なお、機械導入は生産力発展をもたらす一方、失業者および賃金所得の喪失を生み出す点で、シスモンディ的な供給過剰につながりうるとする（もしくはセー法則を否定するという）解釈もあったが、あまり支持されていない。

むしろ同時期の日本では、マルクスへの理論的連続性を視野に、機械導入による雇用減少が矛盾なく導出されているかどうか、大きな論点となってきた。そして真実（1959）をはじめとする諸研究では、資本蓄積にともなう富裕の一般化を主張するスミスのな枠組みから、資本蓄積にともなう貧困の蓄積というマルクスのな枠組みへの転換点として、リカードウ機械論の理論的意義が考察され、そこに革新性が見いだされてきた。

上記の限りでは、戦後日本においても、スラッフアの経済学的考察およびリカードウ解釈は、それほど大きな影響を及ぼしていないといえよう。ただし、機械についてのリカードウの旧来の立場から、新たな立場への転換に関する諸見解（連続説・断絶説）、新たな立場への転換期についての考察（例えば、羽鳥 1988）では、その限りではない。

6. むすび

これまで本報告では、『リカード全集』編者序文でのスラッファの考察は、リカード機械論研究への大きな刺戟とはなったけれども、その理論的意義の十分な評価には必ずしも至っていないことを論じてきた。このようにリカードの機械論が、リカード自身の経済学体系、ひいては既存の経済学的枠組みを、いかに変更する可能性を持っていたのか、スラッファ的なアプローチでは、十分に評価されてきたとはいえない。そうであるならば、スラッファによる古典派的アプローチの復権の試みが、さらなる発展を遂げるためにも、リカード機械論の理論的意義の再検討が求められているといえよう。

参考文献

- Ricardo, D. 1951-73. *The Works and Correspondence of David Ricardo*, 10 vols., edited by Piero Sraffa, Cambridge: Cambridge University Press. (堀経夫ほか訳『リカード全集』全10巻, 有松堂書店, 1970-75年) [本稿では *Works* と略記]
- Dobb, M. 1973. *Theories of Value and Distribution since Adam Smith: Ideology and Economic Theory*, Cambridge: Cambridge University Press. (岸本重陳訳『価値と分配の理論』新評論, 1976) .
- Sraffa, P. 1960. *Production of Commodities by Means of Commodities: Prelude to a Critique of Economic Theory*, Cambridge: Cambridge University Press. (菱山泉・山下博訳『商品による商品の生産』有斐閣, 1978年)
- Wicksell, K. 1934. *General Theory, Lectures on Political Economy*, vol.1, translated from Swedish by E. Classen, vol.1, London: Routledge & Kegan Paul.
- Morishima, M. 1981. *Ricardo's Economics.: A General Equilibrium Theory of Distribution and Growth*, Cambridge: Cambridge University Press. (高増明ほか訳『リカードの経済学—分配と成長の一般均衡論』岩波書店, 2003年) .
- Samuelson, P. 1989. Ricardo Was Right!, *Scandinavian Journal of Economics*, 91(1):47-62.
- Kruz, H. D. and Salvadori, N. 1992. Morishima on Ricardo: Review Article, *Cambridge Journal of Economics*, 16(2), pp.227-47.
- 真実一男. 1959. 『機械と失業—リカード機械論研究』理論社.
- 羽鳥卓也. 1988. 「リカード機械論の転換期について」『経済系』15:56-73.

(上記以外の参考文献については、報告時にお知らせする予定です)